グリーンサークル20号

多摩市立グリーンライブセンター25 周年記念号

- **多摩市立グリーンライブセンター25 周年によせて**　川添 修
- **グリーンライブセンターの歩み**　オークヴィレッジ（株）田中 満治、（株）あい造園設計事務所 藤原 清、みどりとくらし設計工房 峰岸 久雄
- **多摩市みどりのかわら版**　浦野 卓男

ナンバンギセル

多摩市立グリーンライブセンター２５周年によせて

多摩市グリーンボランティア連絡会　代表　川添 修

多摩市立グリーンライブセンター建設当時は、多摩ニュータウン事業着手以来 24 年が経過して、多摩ニュータウンには 12 万人もの人々が生活を営み、各種公共施設等も整い、ますます充実した快適な街になろうとしていました。また、バブル景気が始まった時代でもありましした。

多摩センター地域では、パルテノン多摩の開設（1987 年）や多摩そごうが開設（1989 年）され、多くの人々が集まるエリアになりました。また、1986 年には恵泉女学園短期大学が、1988 年には恵泉女学園大学が南野に開校しています。

当時、公園緑地の整備が進み豊かなガーデンシティーが形成されつつありました。特にニュータウン区域が市域の 6 割を占める多摩市では、約 8 割の公園緑地整備が完了し市民に親しまれていました。しかし、これら多くの公園緑地が充分に活用され、親しみ、守り育てていくかが多摩ニュータウン事業や多摩市にとっても大きな課題であると認識され始めました。

そこで、多摩ニュータウンにおける“みどりの文化”の醸成を目指して、緑のキーステーションとなる「都市緑化植物園と緑の相談所」の検討が進められていので、その望ましいあり方を検討策定する必要から「みどりの活動構想策定研究会」が創設され、1988 年から研究会を重ね「多摩グリーンライブ構想」が取りまとめられました。この構想を受けて、「都市緑化植物園と緑の相談所」から「多摩市立グリーンライブセンター」となりました。

1990 年 4 月にオープンした「多摩市立グリーンライブセンター」は、2010 年度まで多摩市の直営で運営されてきました。しかし、多摩市の行財政改革の波によって、グリーンライブセンターも廃止や指定管理者化の検討が進められる状況にありました。

廃止や指定管理者化されると、市民が気楽に訪れたり、グリーンライブの体験や再発見、学び等ができなくなるとの思いから、2008 年秋ごろから多摩グリーンボランティア森木会や仲間数人とグリーンライブセンターを残す方向は無いものかを相談し始めました。2009 年秋からは、多摩市とも相談を重ね市民ボランティアだけでは運営は難しいので、どこかしっかりした団体とタッグを組んで取組みたいと相談したところ、当時の市長が恵泉女学園大学に相談していただき、運営の一翼を担っても良いとの回答を得てもらいました。

2010 年の夏からは、本格的に市民も参加するグリーンライブセンターの運営について、運営のあり方、運営手法、活動内容、運営に関わる市民団体の集まり方などの検討を始め骨子を定め、2010 年 12 月から多くの団体等に集まっていただき（仮称）「多摩市グリーンボランティア連絡会」の設立準備委会を開催して、「多摩市グリーンボランティア連絡会」の会則策定や多摩市との協定の結び方、活動の基本計画策定等を取り決めました。設立準備会には、恵泉女学園大学からもオブザーバーとして参加していただき、市民がどのような思いでグリーンライブセンターの存続を願っているか、市民団体もしっかりした団体であること等を確認・理解していただきました。

このような準備の成果で、2011 年 4 月から多摩市、恵泉女学園大学、多摩市グリーンボランティア連絡会の三者による「グリーンライブセンター連携推進協議会」で運営してきています。多摩市では、2014 年 12 月にグリーンライブセンターについては、もう少しこの運営方法を継続させることが確認されています。

多摩市立グリーンライブセンターの 25 周年を迎えて、グリーンライブセンターの存続を願う私たちの思いがより確実なものとなるため、グリーンライブセンター連携推進協議会では「みどりのルネッサンス」の理念をもとにした、10 年後を見据えた中長期ビジョンの策定を行っています。

今後とも、多くの市民の皆様のご協力と来訪をお願い致します。

開所式（1990 年 4 月 28 日）

～グリーンライブセンターの歩み～

飛騨の森オークヴィレッジと
都会の森 多摩市立グリーンライブセンターとの繋がり

オークヴィレッジ（株）　田中 満治

多摩グリーンライブセンターの家具について

25 年前、主としてミズナラ材を用い、館内の家具の製作を承りました。

使用した材は、最低でも樹齢 100 年以上、特にテーブルを制作した材は 200 年～300 年ほどの材を用いています。伐採後十分に自然乾燥した厳選した材で、テーブル向きの材、キャビネット向きの材、椅子向きの材を適材適所にあしらいながら、1 点 1 点、飛騨の匠の手により造られたものです。部材の接合には主に「ホゾ組み」などの仕口を使い、木材同士をしっかり固定します。テーブルの天板には「蟻桟」を入れることで、湿度の変化で生じる材の伸縮を抑えます。伝統工法を受け継いだこのような木組みにより組み立てられた家具は、永年の使用により表面は傷んできますが、手直しすることにより、また美しく甦るのが良いところです。

オークヴィレッジ全景

2015 年 9 月にグリーンライブセンターで開催された「木製家具のメンテナンス講座」では、実際に多摩市立グリーンライブセンターで 25 年間使い込まれ、傷んだ家具をどのようにして修復すればよいのか、実際に使用している家具のメンテナンスを体験していただきました。

我々の理念や普段の木製の家具のお手入れ、扱いについても参考にしていただけたかと思います。

作製の様子

オークヴィレッジとは

40 年前、5 人の若者たちが東京から飛騨高山に移り住み、農家の納屋から出発してまもなく、当時の岐阜県清見村牧ヶ洞字奥洞の荒れ地に、木を植えつつ、工房を造り、工芸村オークヴィレッジを創設しました。

以来、私たちは、無垢材の持つ美しさと耐久性を最大限に引き出し、永く使い続けられるモノを届けるために、独自の仕組みを造り出してきました。日本の木を使い、自然素材の仕上げにこだわり、伝統工法を駆使しながら、より進化したモノ造りを行っています。

三つの理念

「百年かかって育った木は百年使えるものに」

私たちが用いる材料は、永い時間をかけて大きく育った木です。その木が生きてきた年月と同じくらい、永く使い続けられるモノ造りを目指しています。

「お椀から建物まで」

日本に生育する様々な木を用いて、玩具、文具、漆器から家具、そして木造建築まで、暮らしの様々な場面で自然素材を生かす提案をしています。

「子ども一人、ドングリ一粒」

木を一本使ったら、100 年後に同じ大きさの木になるドングリを一粒植えて、木を山へ返そう、と考え、NPO 法人「ドングリの会」などの活動を通じて広葉樹の植林・育林を続けています。

グリーンライブセンターと多摩中央公園の昔の話

（株）あい造園設計事務所　藤原 清

多摩中央公園の計画は、昭和 52 年に造園設計事務局 24 社の指名コンペによりスタートしました。当社はまだ設立 4 年目の若手の設計集団にもかかわらず、運よく指名コンペに参加することができました。仕事もほとんどなく悶々とした時期でのチャンスに全力を投入した結果、最優秀賞をいただき歓喜したのを昨日の事のように覚えております。貧乏暮らしでの賞金 300 万円は最高のプレゼントでした。

昭和 53 年から 55 年にかけ基本計画、基本設計を行い 56 年には一部実施設計と進み、初めて 57 年に一部公園工事がスタートしました。

その後 1 年毎に設計と工事が繰り返し行われ、平成 4 年の 3 月に全ての整備が完了しました。

私は 32 歳から 47 歳の 15 年間にわたり多摩中央公園の設計に参加できた事は、私にとっては大きな財産となったと思っております。

「グリーンライブセンター」は昭和 60 年頃から、市の要望で緑の活動拠点として計画が始まりました。多摩中央公園は、都市の基幹公園であり、また市の総合公園として位置付けられておりましたので、積極的な導入を前提に検討し、補助事業の名目に合致する「都市緑化植物園と緑の相談所」の設置が決定されました。昭和 62

開所当初の正面（1990 年）

年より「グリーンライブセンター」の建設が始まり、同時に都市緑化植物の整備も進められました。

ここで問題になったのが、都市公園に数ヶ所ある「緑の相談所」があまりにも不評で、利用者がほとんどなく、立派なハコ物だけがある施設となってしまったことです。そこで当公園に設置する委員会「緑の相談所」は如何にあるべきかを検討する委員会「みどりの活動構想策定研究会」が発足し、「多摩グリーンライブ構想」が平成元年に策定されました。この研究会を通じて、「みどりの相談所」から「グリーンライブセンター」と改名し、この名前が今までのみどりの相談所からの脱皮を如実に表した銘名といえます。

平成２年の開設時はもとより、現在もご指導いただいております島村宣幸様（元グリーンライフ編集長）には、計画時より貴重な簿意見をいただきこのグリーンライブセンターの礎を築いた方だと思っております。前途した「グリーンライブ構想」で提言された「市民参加が可能な仕組みと運営ができる機能を持つ」という基本的な考え方が具現化し、熟成を向えた 25 周年だと確信しております。多摩市、大学、多摩市グリーンボランティア連絡会、有志のみな様に支えられ、ますます充実したグリーンライブセンターになるよう願っております。

開所当初のガーデン（1990 年 4 月）

「緑の探検隊」

みどりとくらし設計工房　峰岸 久雄

多摩市立グリーンライブセンターで行っている「緑の探検隊」は、平成３年にグリーンライブセンターが開設された時から実施している最長寿の小学３年生以上を対象とした環境教育プログラムです。

多摩市立グリーンライブセンターは公園行政における緑の相談所として位置付けられていますが、暮しに役立てる多様な緑との関わりを発信していく施設として「多摩市グリーンライブ構想・計画」という新しい発想で作られています。「緑の探検隊」もその中の一つとして立案されたものです。「多摩市グリーンライブ構想・計画」立案に関わったことから、初動時に責任払いとして指導を担当することになり、現在まで継続することになりました。

設立年に小中学校が第２土曜日が休日となったことから、子供たちの有意義な居場所づくりとしての視点も考慮して具体的なプログラムの立案をすることになりました。グリーンライブセンターのある多摩中央公園を拠点に多摩市内や周辺地域の緑や自然を探検する自然観察会的なプログラムを中心に実施していきました。

その後、鶴牧西公園に小さな棚田が整備され、田んぼのプログラムを緑の探検隊で実施することになり、田起し・田植え・案山子づくり・稲刈り・餅つきと、いいとこ取りの楽しい農業体験なので参加者の子供たちには人気でした。このプログラムは「オリザクラブ」として独立、さらに鶴牧西公園の果樹園の斜面では「ソバクラブ」「ポテトクラブ」「パンプキンクラブ」「セサミクラブ」と農業体験プログラムが実施され、数年間半数近くの指導を担当していましたが、グリーンライブセンターの所長やの担当者が変わったりする中でこれらの多くはなくなってしまいましたが、「緑の探検隊」だけは現在まで継続しています。

1996 年「緑の探検隊」 風を感じる

当時から人気バウムクーヘン作り

「緑の探検隊」の基本理念は、知識を知恵に、暮らしに役立つ技を学ぶ、体感型環境教育です。壊れかかっている子供たちの体内時計を本来の姿に、旬を感じられる、五感と五官を磨くためのプログラムを実践しています。自然の不思議さを体感する観察プログラム、自然の恵みを頂く食育プログラム、自然の恵みで創る木育プログラムの３本を柱に、テーマを設定して季節感のある展開をしています。原則的には小学３年以上となっていますが、保護者同伴なら幼稚園児も参加できるようにしています。

先日、パルテノン多摩で開催されたエコフェスタで、「緑の探検隊」の２期生の方が訪ねてこられ、「緑の探検隊」に参加したことから環境に興味を持ち、環境調査等に関わる仕事を選びましたと話され、とても感動しました。

多摩市みどりのかわら版

みどりの力　～グリーンライブを復活～

多摩市環境部長　浦野 卓男

グリーンライブセンター（以下、ＧＬＣ）は、平成２年に開設しました。当初は、多摩市文化振興財団が管理運営を行っていましたが、１０年後の平成１２年からは、市の管理運営となりました。その後も管理運営費の縮減に努めてきましたが、厳しい市の財政状況により、さらなる経費縮減が求められ、場合によっては廃止となる状況となりました。

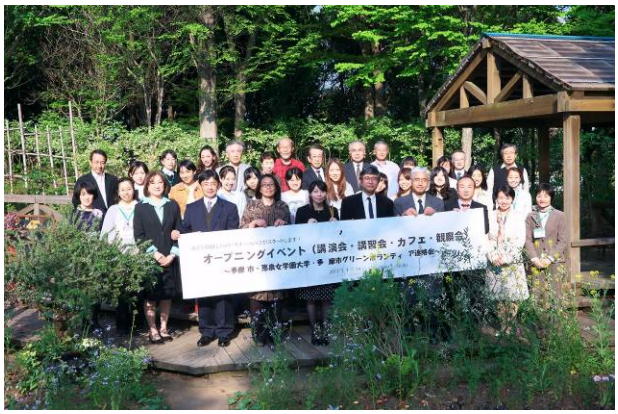
ＧＬＣの管理運営については、ＮＰＯや民間等による運営に移行する方針が出されていた中で、「大学・市民・市の三者が連携した協働事業による運営」として、平成２３年４月から恵泉女学園大学、多摩市グリーンボランティア連絡会、多摩市の三者による管理運営が始まりました。

ガーデンや温室の管理、緑化相談、ボランティア講座の運営、自然環境保全に係る体験学習など、３者が役割分担しながら運営しています。また、経費的にも、ピーク時の１／５となり、経済的にも評価が得られる運営状況になっています。

今では、花と緑を鑑賞するだけでなく、憩いや安らぎの時間を過ごす「オーガニックカフェ（コーヒー等）」のサービスも提供しています。

平成２年のＧＬＣの誕生に備えて、「多摩グリーンライブ計画」が策定されました。そこには、３つの構想で構成する「多摩グリーンライブ構想」が盛り込まれています。「グリーンライブ」とは、みどりを中心とした市民の活動が生き生きと実践されていくことを意味しています。昨年度まとめられた「みどりのルネッサンス」は、「多摩グリーンライブ構想」を今まさに実現する道すじを示したものであるとも言えます。

多くの機能と価値を持つ「みどり」は、人とみどり、地域コミュニティといったものをつなぐという新たな可能性と価値を秘めています。その中心的存在となるＧＬＣは、一時の廃止論を超えて、２５年の歳月を経て、今や欠かせない存在であり、多摩市の未来をも左右する存在だと信じています。さらなる役割に応えるためにも、皆さんの支援をお願いします。



三者連携の協働事業の開始（2011 年 4 月）

現在のグリーンライブセンター（2015 年）

表紙の絵

「ナンバンギセル」（ハマウツボ科）

葉緑素を持たずススキなどに寄生します。

昔はニュータウンのあちこちで見られましたが、今はなかなか会えなくなりました。

万葉集では「思い草」と詠まれています。

絵・内城 葉子

＜**プロフィール**＞1949 年東京生まれ。
1986 年国立科学博物館第 2 回植物画コンクール文部大臣奨励賞、1989 年世界らん展ボタニカルアート部門ブルーリボン賞、英国王立園芸協会ロンドン・フラワーショーGoldMedal 受賞など
＜**所属**＞日本ボタニカルアート協会、日本植物画倶楽部、どんぐり山を守る会代表
＜**著書**＞「鏡の中-俳句と植物画」共著、2005 年新風舎。他、絵本や学習図鑑などに描画。

雑木林などの活動を通じ、実際の木々や草花に触れることが細部に及ぶ精密な描写となり、植物本来の温もりを感じられる作品が特徴です。

編集後記

グリーンライブセンターが 25 周年を迎え、この 9 月には写真展や多くの記念講座が開催されます。写真展の開催にあたって、開館当時から現在に至るまで、たくさんの写真を目にすることができました。

1 枚 1 枚の写真は、撮影した年代も季節も様々ですし、写る人、訪れた目的もそれぞれ異なるはずです。

今日までに多くの方が携わり、訪れたその時の思い出…。細かなたくさんのものがパズルのピースの様に合わさったことで 25 周年を迎えることができたのだと思いました。

「あの時見た植物は大きくなったかな？」「そろそろあのお花の季節かな♪」今後も皆さまの憩い・集い・学び・安らぎ・楽しみなどに寄り添えるような愛される施設となりますように…☆

そして、この 25 周年記念号発行にあたり、多くの方にご協力いただきましたことを感謝いたします。

（高澤　愛）

多摩市グリーンボランティア通信　グリーンサークル 20 号
発行日:2015 年 9 月 5 日
編集:多摩市グリーンボランティア連絡会　事務局
発行責任:多摩市グリーンボランティア連絡会　事務局
〒206-0033 東京都多摩市落合2-35 多摩中央公園
多摩市立グリーンライブセンター内
電話 042-375-8716 FAX 042-375-0087
ホームページ http://www.keisen.ac.jp/tglc/